

BanG Dream! 短編集

ENDLICHERI

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは、バンドリキャラたちが織りなす笑いあり、涙あり(?)なひと時をお送りします。たまに記念回も出すよ。

目次

3月4日といえば？	1
モカだけど	3
髪型、同じでは？	6
やらかした時って、敬語になるよね？	9
メイドの日だって	12
あの時から	15
マーキング	18

3月4日といえは？

「つてことで、今日は『紗夜の日』！おねーちゃんの日だよ！」

「突然何？急に呼び出すなり唐突に『紗夜の日』だとか……………」
「そもそも、私の誕生日は3月20日よ？」

「えーと……………初めまして、僕の名前は『堂本悠貴』です。今、僕のバイト先である『CIRCLE』の常連客である人たちと受付でお話をしています。常連客の名前は『氷川紗夜』さんとその双子の妹である『氷川日菜』さん。そして、紗夜さんと同じバンドに所属している『今井リサ』の三人です。他のお客さんはいないので、「どいてください」と注意はしてません。オーナーである『月島まりな』さんがそういう人ですしね……………」

「つてか、ヒナも誕生日一緒でしょ？」

「チツチツチ、リサちゃんも分かってないな。今日は3月4日、『34』の日なんだよ！つまり！おねーちゃんの日と言っても過言ではない！」

「全国の『さよ』さんは違うんですか？」

「堂本さん、ツツコむところはそこではないはず……………」

「ほらほら！ユウ君もお祝いしてよ！」

「こんなに本人は納得してないのに……………」

「アハハ……………」

「日菜さん、ここで紗夜さんに会うなり嬉しそうにしているので、「何かありそう……………」」と思ってしまう僕でしたが……………正解でしたね。どこでそんなネタを拾ったのやら……………」

「ちなみに、昨日はあたしの日なんだよ〜！」

「日菜の・・・？」

「・・・あっ！もしかして、『ひな祭り』だから、とか？」

「せいかりい！さっすがリサちゃん！」

「アハハ・・・当たっちゃった・・・。」

「リサさん、もしかして冗談で言いました？」

「掘り下げなくていいからね！」

それはフリですか？

まあでも、昨日のT w i t t e rでは『M o r f o n i c a』のきりがやとうこ桐ヶ谷透子』ちゃん・・・の中直田姫奈(すぐたひな)さんの人が「ひな祭り？あたしの日だー！褒め称えよー！しない人は頭バーンだー！」とか騒いでいたけど・・・？バンドメンバーで1人、『頭バーン』された人がいるらしいよ。

「はあ・・・。それで、私の日とかはさておいて、何が言いたいのか？」

「ないよー。」

『・・・はい？』

「今日はおねーちゃんの日だね。以上！」

「それ、だけ・・・？」

「うん！」

「紗夜さん、次は3月16日で、その次は20日。で、あとは9月10日ですね。」

「何故3日分あるんですか!?!」

「だって、3月16日は工藤晴香(くどうはるか)(中の人)誕生日ですし、20日も氷川紗夜誕生日ですし、9月10日は910の日ってことで・・・。」

「初耳です!!」

そりゃ初耳でしょうね。……………これで初耳学出れるかな? (※無理です)

モカだけど……………

土日のバイトには、ちゃんと休憩時間を貰える。学校終わりは2〜3時間しかないけど、まりなさんは「休憩行つていいよ」つて言ってくれる。まあ、休憩するぐらいなら早く仕事を覚えたいからしないんだけど。

で、今はカフェスペースで休憩中。

「およろ、こんなところで休憩ですか〜?」

「うん?……………あ、モカさん。それに蘭らんさんも。」

「ども〜。」

「こんにちは。」

気の抜けた挨拶をしてくるのは、『アフターグローウ』のリードギター担当の『青葉モカ』さん。隣にいるのはギターボーカルの『美竹蘭らん』さん。彼女たちは中学からバンドをやってるから、実力はかなりのものです。

「今休憩です〜?」

「はい。あと30分ぐらいしたら戻りますけどね。」

「じゃあ、あたしたちと一緒だ〜。」

「えっ?……………あ、そっか。Afterglowも次の時間からでしたね。」

「そうなのよ〜。つてことで蘭〜、ちよつとお茶しよ〜。」

「えっ?いやでも、悠貴さん休憩中でしょ?あたしたちがいたら、休憩にならないんじゃない?……………?」

「だいいじぶ〜。悠貴さんだつてあたしたちと話して疲れることなんてないから〜。ね〜?」

君はどの立場で言ってるんですか？……………って言おうと思っただけど、面倒なことになりそうだから止めておこう……………。

「よいしょ。お隣失礼します。」

「そういうのは座る前に言うものですよ。」

「モカだったら……。ところで、悠貴さんは何を飲んでるんですか？」

「僕はモカだよ。」

「あたし？」

「モカだけどモカじゃないよ……………」

「むしろ、君は『飲まれる』方じゃなくて『飲み込む』方でしょ？」

「でも悠さん、モカちゃん飲んでるんでしょ？」

「言葉足らずですみませんね。僕が飲んでるのは『カフェモカ』です。」

「ちえく、悠さんノリ悪いですな？」

「蘭さん、黙らせる方法は？」

「ない。」

即答されたよ……………。

「まあ、そうですね……………」

「……………モカちゃん美味しい？」

「まだ言う？」

「そりやく言いますよ。今、悠さんを弄るネタがそれしかないのです。」

「蘭さん、あと4人呼んでもらっていいですか？」

「えっ、3人じゃなくて……………？」

「4人ですよ。5つ子の、残り4人。」

「いや一人っ子だし！」

蘭さんは5つ子の4番目だと思ってたんだけどなく？

「モカは弄らないの？」

「うくん……………なんかあります？」

「えっと……………ヲタク？」

「以外あります？」

「ふっふっふ、モカちゃんを弄るのは、至難の業だよ。」

「……………僕、もう戻りますね。では。」

「あ、ちよつと!？」

もうネタ尽きたし、これで終わり。

髪型、同じでは？

最近できたバンド『Morfonica』。彼女たちのバンドの特徴は、なんと言っても『バイオリン』という担当がいること。『DJ』なら2バンド知ってるけど、バイオリンが入ってるバンドは聞いたことがない。そして、その『Morfonica』は、よくCiRCL Eに来る。

「こんにちははく……………」

「こんにちは。どうしたの？元気ないようだけど。」

「実は、髪型がなかなか決まらなくて……………」

「へ、へえ……………」

『Morfonica』の自称リーダーらしい『ふたば二葉つくし』ちゃん。ドラム担当。どうやら、いつもの髪型のツインテールが決まってるらしい。……………違いが分からないんですけど？

「あ、スタジオならもう使えるよ。」

「ありがとうございます。はあ……………」

「が、頑張つて……………」

目の前でため息つかれたら、下手に言葉かけれないじゃない……………

「悠さくん！」

「お、透子ちゃん。ましろちゃんも。」

「こんにちは……………」

「さっきそこでシロと会ったんで、一緒に来ちゃいました！」

「そうなんだ。つくしちゃんならもうスタジオ入ったよ。」

「りよーかいです！……あ！そういうえば、ふーすけの様子はどうでした？」

「つくしちゃん？」

一応だけど、透子ちゃんはましろちゃんをつくしちゃんと呼び方がものすごく独特なんです。僕も最初聞いた時は犬や猫といったペットの名前かと思いましたよ……。

「なんだか悩んでいたよ。『髪型が決まらなくて』とか？」

「やっぱそうかく。」

「学校でも言ってたもんね……。」

「で！で！」

「うん？」

「悠さんはふーすけの髪型の違い、分かりました？」

「僕？いや、分からないよ……。」

「ですよね〜！女心を分かっているそうで分かっていない悠さんですもんね〜！」

「ちよつと透子ちゃん……！」

この子、よくも躊躇わずにそんな事が言えるね〜。後で説教してやろうかな……？

「あ、あの……！私たちも、分からなかったから、気にしないでください……！」

「うん、フオローありがとう、ましろちゃん。」

「それはそうと！ふーすけの髪型、どこがいつもと違いますかね〜？」

『それはそうと』って、君が振ったんでしょ？責任持っていただけです！？ねえ！？

「何度かほどいては結び直しているけど……。」

「結ぶ位置が違うとか?」

「ええ〜? そんなミクロンサイズの違いですかね〜? うーん……」

「あ! 昨日と髪の毛の量が違うとか!」

「だったらまず髪型より抜け毛の心配からだね。」

「そっか。」

毛の量が違うと思わせる人は、髪を切った人・抜けていつてる人・育毛・カツラをしている人だけだから。

「桐ヶ谷さん、倉田さん、いつまで話しているの?」

「あ、ルー! 聞いてくれよ! ふーすけのやつがさ——」

「早く練習始めるわよ。」

「しろちゃん、とーこちゃん、行くよ。」

「ななみも待ってくれよ!」

「あ、えつと……し、失礼します……!」

「はい、ごゆつくり。」

……やっぱり、Morfonicaのメンバーは互いの呼び方がおかしい気がする……。

やらかした時って、敬語になるよね？

「……………遅いですね。」

「そう……………ですわ……………」

「彩ちゃん、悠貴くんから連絡来た？」

「うーん……………あ、今来た！」

「ほんとなの？」

「うん。えつとね……………」『先にお店に行っていてください。すぐ行きます。』だって。」

「敬語すぎませんか？」

今日は、悠貴さんと花咲川3年生の計6人で昼食を取ることにになりました。ただ……………そんな悠貴さんが待ち合わせの時間に来なくて少し困っています……………。

「あ、もう1個来たよ。」

「今度は……………どんな内容ですか……………」

「えつとね、『本日はお詫びとして全て奢らせてください。お願いします。』だって。」

『……………』

「それはそれで、困るわね……………」

「ええ……………」

「どうします……………」

「……………とりあえず、行こっか？」

丸山さんの一言で、私たちは昼食に行こうとしていた場所に行き、店員さんに「もう一人来る」と伝えておいて、先にメニューを選びました。

「あの……?」

「白金さん?」

「よろしければなんですけど……堂本さんには……このお店だけ奢らせるのは……どうでしょうか……?」
「そうね、このお店だけでかなりの値段になるでしょうし……」
「そうしましょうか。」

この後行くかもしれない場所の会計までさせたら、私たちの方が罪悪感を持つということになり、このお店だけ奢らせる事を決めた時、私たちの中で話題の人物がやって来ました。

「あ、来たよ。」

「遅れてすみません……」

「いえ、さほど影響はないので大丈夫ですけど……」

「何か、あつたんですか……?」

「実は……寝坊しまして……」

「あはは……」

松原さんが苦笑いした気持ちは分かります。私も口から出るのは苦笑いでしょうからね……。

「もう本当に申し訳ないです……」

「あの……聞くのも申し訳ないと思うんですが、何時に起きたんですか?」

「えーつと……1時半ぐらいにー……起きまして……」

「その頃には彩ちゃん以外はいたわね……」

「その5分後に来ました……」

「もうね、お金もたくさん持ってきたので、もうなんでも買ってください。なんでも奢らせていただきますので。」

「いつもより敬語でいつもより腰が低いですね……」

「もうちよつと見ていたいけど、さすがにちよつと絡みづらいわね……。」

「は、はい……。」

この後、この6人で出来る限りのウインドウショッピングをしました。途中カフェに寄りましたが、ずっと堂本さんが「これ欲しいの?」と言ってきて、『全部払う気だ』と思いつつ、私は申し訳ない気持ちいっぱいでした……。

メイドの日だつて。．．．．．どこが？

「おい、悠さーん！」

「うん？透子ちゃん、こんにちは。Morfonicaのみんなもこんにちは。」

「こんにちは！」

「ねえねえ悠さん、今日『メイドの日』なんですつて！」

「へえ。」

「で？で!？」

「．．．．．うん？」

この娘は突然何を言い出すのかと思えば、何を言ってるんだ？

「悠さんはどう思いますか？あたしたちのメイド服姿！」

「と、透子ちゃん!？」

「急に何を言うのかと思えば？」

「すみません堂本さん。突然押しかけてしまつて。」

「もう透子ちゃん！悠貴さんに謝りなさい！」

「ええ？だつて気になるじゃん！悠貴さんつてたくさん女の子の友達がいるのに『彼女がいる』つて噂が微塵もないなんて！」

口で言うのも疲れるかれここで言うけど、さらつと失礼なことを言うね、この娘は。お兄さん、ちよつと怒るよ？

「で、どうです？あたしたちのメイドは？」

「うーん．．．．．はつきり言うといらない。」

「「ええ！!？」」

「こら誰だ？透子ちゃんに混じって『ええ〜!?!』言うたの？」

「わ、私でもダメですか!?!」

「つくしちゃんは抜けてるところがちよいちよいあるから却下。」

「うっ!?!」

「七深ちゃんはほぼ確実に感性の違いでアウト。」

「そ、そうかな〜?」

「で、言い出しっぺの透子ちゃんは見た目と性格でアウト。」

「見た目と性格って!?!」

「溜唯ちゃんは……そんなこと起きないって言って現実突きつけるでしょ?」

「そうですね。」

「ましろちゃんは……論外だね。」

「ろ、論外……!?!」

むしろ『バンドリ』というコンテンツ内で見た目&中身でメイドが似合う人がいるのか怪しいもんね。

「論外……そうですよね、私なんて月ノ森に入れただけでも奇跡なのに、メイドなんて論外ですよ……。」(※ましろです。)

「じゃ、じゃあ誰がメイド似合うんですか!?!」

「うーん……『マーメイド』の『日高ひまり』さん?」

「誰!?!」

「あれ、知らない?治安が悪いことで有名な『Mermaid』のDJ担当のひまりさん。どうやらメイドのバイトをしているしいけど。」

「そんな名前のバンド、知ってる?」

「知らなくい。」

「広町も知らない……。」

「そりやそうでしょ。だってバンドじゃなくてDJユニットなんだから。」

「分かるかい!?!」

「堂本さん、せめてバンドリ内での会話にしてください。同会社のコンテンツといえど、別コンテンツを加えるのはバンドリのガイドラインに反することなので。」

「善処します。」

ところで、ましろちゃんはいっつまで沈んでるのさ？

あの時から……。

私たち Roselia は、どんなに辛いことがあっても、この5人の絆で乗り越えてきた。これまでも、そして、これからも……。

「友々希那〜！」

「?……リサ、どうしたの?」

「うん? いや、偶然友希那を見かけたからさ〜！」

「そう……。」

「そういえば、最近何かあった?」

「最近?」

「こそ! Roselia で何かあったかな〜? って。」

「Roselia で体験したことは、リサだって知ってるでしょ?」

「あ。そ、そうなんだけどさ! その〜……『友希那から見えてうだったかな〜?』って。えへへ……。」

何かしら? 今日のリサはリサではない気がする。まるで、リサの姿をした誰かのような……?」

でも……姿や声、性格はリサだから、そんな違和感が消えていってしまう。」

「そうね……最近だと、リサの家に Roselia のみんなで泊まったことが印象的かもしれないわね。」

「あー、そういえばそんなことあったねー。」

「あなた、噂と勘違いとはいえ、ずっと怯えていたのよ? まあ、逆に忘れたい記憶なのかもしれないけど。」

「まあねー。ねえ、他には?」

「えっ? えっ? ……そうね。Roselia で F・W・F に出

場したわね。」

「っ!？」

「それも、予選で一番の成績で。あの時はリサが書いた詞で予選を突破したわね。あの歌詞は昔見たシロツメクサの花畑の景色を思い出させてくれるわね。」

「………そっか。目標にたどり着けたんだね。」

「リサ?」

「えっ?ううん、なんでもないよ……。あ!アタシ用事あったんだっ
た!じゃあまたね!」

「え、ええ……。」

何なのかしら? やっぱり、今日のリサは少し様子がおかしいわ
ね……。

あの時から、みんなは凄く成長してる。結成した時からの目標だっ
たフェスにも出場できた。幼馴染が作った詞で Roselia の曲
を作ったりもして……。

旅立った命たちにはたどり着けなかった世界をこれからも創って
いって。応援してるから。

でも、たまにはアタシたちを思い出して、話をしに来てくれると嬉
しいな。

「また逢えるその日まで………たくさん笑いあえるその日まで………
どうか、Roselia を続けていってね………。」

できるなら、またあの景色をステージの上から見たいな………
陽だまりのように赤く染められた、あの世界を………。

「リサ、あなたにこれをあげるわ。」

「友希那から!?!珍しいね〜!ありがとう——って、何?この本何?」

「記憶力が良くなる本よ。安心して、燐子と選んだ本だから。」

「いやいやいやいや、安心できませんよ!何、この前から何かあったの!?!」

それからリサは、5月13日になると記憶力に関係する物を貰って
いくのであった……………。

マーキング

それは、ある日の学校帰り。僕はたまたま帰り道で会った美咲と共に、美咲の家に立ち寄った。

「どうぞー。」

「お邪魔しまーす……って、どうしたの？」

「いやー、色々忙しくてさ……。」

すぐに美咲の部屋に招かれ、部屋主が僕を部屋に入れようとしたけど、僕はその部屋の中の……き、汚さに驚いてしまった。もちろん、『散らかってる』って意味だよ!!

「片付けようとは思ってるんだけど、疲れに負けちゃって……。」

「まあ、分からなくはないよ。とりあえず、部屋片付けよつか？」

「そう……だね。二人なら早く終わるか。」

「じゃあ、手をつけてもいい場所ってどこ？」

「……へっ?」

「ほら、仮にも女の子の部屋なんだから、男に見られたくないものだって、あるでしょ……?」

「……あぁー!そういうことね。確かに見られたら困るものがあるけど、悠斗になら別にいいかなって。」

「いや、それはどうかと……。」

「今まで、まるで家族かのように接してきたんだからさ。」

「……そう。」

僕たちは美咲の部屋の片付けを始めた。僕は美咲に指示された場所から片付けを始めてる。

ふと美咲を見た。西日が微かに射し込む部屋で、美咲の髪が黄金の清流せいらりゅうのように見えた。自覚はしている、僕は美咲が好きだつてことを。だからこそ、『まるで家族』っていう言葉が痛かった。僕は、出逢った時から君が好きだつていうのに……。

「ふうく。」

「やっぱり疲れるの?」

「まあねく。普段は他人という時より手抜きだから、イメージ保つのもなかなかだなくつて。」

「僕の前でなら、その甲冑イメーなんて着けなくていいでしょ?」

「まあね。出会った時から親友…….というか兄弟つて感じで接してきたからね。」

「兄弟、ね……。」

「えっ?…….もしかして、恋人が良かった?」

「いや、まだそんなのには…….!!」

『『まだ』?』

「あつ。」

ちよつと口を滑らしてしまい、美咲の部屋の中は気まずい空気が漂い始めた。

そんな空気を消そうと言葉を発したのは、美咲だった。

「…….ねえ。」

「な、なに…….?」

「その…….あたしと、恋人になりたいの…….?」

「…….で、出来れば…….なりたくないあつて…….」

「ふーん…….」

そこからまた、沈黙が部屋を支配した。

「悠斗。」

「うん——んっ!？」

名前を呼ばれて美咲の方を振り返ったら、美咲の顔が目の前にあって、唇が何か柔らかい感触に襲われた。僕は何も理解できなかった。

唇に当たる柔らかい感触………。

目に映るのは目を閉じて頬を赤らめてる美咲の顔………。

何が起きているのかようやく理解できた時には、美咲の顔は僕から離れていた。

「み、美咲………!？」

「この先、ハロハピの活動もどうなるかわからないから………今はこれで我慢して……。」／／／

「う、うん………。でも、今——」

「今のは………マーキング、かな？」／／／

照れ隠しのように頬を赤らめて笑う美咲を見て、僕は彼女から離れることは一生出来ないと思った……。